

## 陸機の楽府について

阿部正和

## (一)

陸機の楽府には、彼の懐いを詠んだ所謂詠懐的作品と、そうではない非詠懐的作品がある<sup>注1</sup>。しかし陸機の楽府のうち、現在の我々が見ることが出来る限りにおいて、という条件が付くものの、陸機以前に同題もしくは関連のある作品が現存しているものが、その半数以上を占めている<sup>注2</sup>。したがって陸機の楽府を理解するには、楽府の文学的特質上、前代の諸作品と比較する必要がある<sup>注3</sup>。本論文では、陸機が前代作品をどのように継承して楽府を制作したのか、と、いうことを明らかにするとともに、陸機の楽府制作の意図を考察することを目的とする。

## (二)

陸機「門有車馬客行」(『文選』卷二八)

1 門有車馬客 門に車馬の客有り

- |          |   |
|----------|---|
| 2 鷺言発故郷  | 鷺して言 <small>こと</small> に故郷を発し                   |
| 3 念君久不帰  | 君の久しく帰らざるを念ひて                                   |
| 4 濡迹涉江湖  | 迹を濡して江湖を涉ると                                     |
| 5 投袂赴門塗  | 袂を投じて門塗に赴き                                      |
| 6 攬衣不及裳  | 衣を攬 <small>と</small> るも裳に及ばず                    |
| 7 拊膺携客泣  | 膺を拊して客を携へて泣き                                    |
| 8 掩淚敍温涼  | 涙を掩 <small>おさ</small> ひて温涼を敍 <small>の</small> ぶ |
| 9 借問邦族間  | 邦族の間を借問するに                                      |
| 10 側愴論存亡 | 側愴として存亡を論ず                                      |
| 11 親友多零落 | 親友 多く零落し  |
| 12 旧齒皆彫喪 | 旧齒 皆な彫喪す  |
| 13 市朝互遷易 | 市朝 互ひに遷易し                                       |
| 14 城闕或丘荒 | 城闕 或いは丘荒となる                                     |
| 15 墳壟日月多 | 墳壟 日月多く   |
| 16 松柏鬱芒芒 | 松柏 鬱として芒芒たりと                                    |
| 17 天道信崇替 | 天道すら信 <small>まこと</small> に崇替するに                 |

- 18 人生安得長 人生 安んぞ長きことを得ん  
 19 慷慨惟平生 慷慨して平生を惟ひ  
 20 俛仰独悲傷 俛仰して独り悲傷す

「門有車馬客行」は、陸機の望郷の懐いが詠まれた作品であるが、彼が依拠した作品は、曹植の「門有万里客行」である。

曹植「門有万里客行」(『曹子建集』卷六)

- 1 門有万里客 門に万里の客有り  
 2 問君何郷人 君に問ふ 何れの郷の人ぞと  
 3 裳裳起従之 裳を褰げ起ちて之に従ひ  
 4 果得心所親 果して心の親しむ所を得たり  
 5 挽裳对我泣 裳を挽き我に対して泣き  
 6 太息前自陳 太息して前みて自ら陳ぶ  
 7 本是朔方士 本は是れ朔方の士なるに  
 8 今為吳越民 今は吳越の民と為る  
 9 行行将復行 行き行きて将に復た行かんとし  
 10 去去適西秦 去り去りて西秦に適かんと

曹植の冒頭の二句は、「門に万里の客有り、君に問ふ何れの郷の人ぞと。」と、客に対して主人が、どこの人かと尋ねるだけであるのに対し、陸機は、「門に車馬の客有り、

駕して言に故郷を発し、君の久しく帰らざるを念ひて、迹を濡して江湖を渉ると。」と、客が主人に対してなぜやってきたのかということを語らせる。客が門前に訪ねてくるという場面設定は曹植と同じであるが、陸機は発話の主体を巧みにすり替えているのである。曹植は、冒頭の二句に続いて「裳を褰げ起ちて之に従ひ、果して心の親しむ所を得たり。」と、主人が客を出迎え、その人は親しむ所であったとする。陸機も曹植の三・四句を受けて「袂を投じて門塗に赴き、衣を攬るも裳に及ばず。」と、客を出迎えているが、主人が出迎える時の描写を対句を用いて二句に増やし、そのあわてた様を強調している。次に曹植の五・六句が「裳を挽き我に対して泣き、太息して前みて自ら陳ぶ。」と、客が主人の裳を引っ張って涙を流し、ため息をついて話をしたとなつてののに対して、陸機は「膺を拊して客を携へて泣き、涙を掩ひて温涼を紕ぶ。」として、また泣く主体を曹植の客から主人に変えている。

曹植は、七句から一〇句で、客がもとは北方の人間であつたのに、今は吳越の地に住んでおり、さらに旅を重ねて、西秦の地へこれからも行くことを述べる。しかし陸機は、九・一〇句に「邦族の間を借問するに、惻愴として存亡を論ず。」と、曹植にはなかった、主人が客に故郷の様子を尋ね、それについて客が答えるという二句を挟み、一一句以下に続く内容に必然性を持たせている。一一句以

下の内容は、変わり果てた故郷の様子である。それを聞いて、主人が「天道すら信に崇替まことするに、人生 安んぞ長いづきことを得ん。慷慨して平生を惟ひ、俛仰して独り悲傷す。」と、故郷に対する懐いを述べるのである。

このように陸機は、曹植の「門有万里客行」の、訪ねて来た客を主人が迎えるという場面設定をふまえながら、客の訪問理由を明らかにし、客の話聞いて主人が思いを述べるといふ形に変化させていることがわかる。

陸機「苦寒行」(『文選』卷二八)

- 1 北遊幽朔城 北のかた幽朔の城に遊げば
- 2 涼野多嶮難 涼野には嶮難多し
- 3 俯入穹谷底 俯しては穹谷の底に入り
- 4 仰陟高山盤 仰いでは高山の盤に陟る
- 5 凝氷結重澗 凝氷は重澗に結び
- 6 積雪被長巒 積雪は長巒を被ふ
- 7 陰雲興巖側 陰雲は巖側に興り
- 8 悲風鳴樹端 悲風は樹端に鳴る
- 9 不覩白日景 白日の景を覩ず
- 10 但聞寒鳥喧 但だ寒鳥の喧しきを聞くのみ
- 11 猛虎憑林嘯 猛虎は林に憑りて嘯き
- 12 玄猿臨岸嘆 玄猿は岸に臨んで嘆く
- 13 夕宿喬木下 夕に喬木の下に宿り

- 14 慘愴恒鮮飲 慘愴として恒に飲び鮮し
- 15 渴飲堅冰漿 渴いては堅氷の漿を飲み
- 16 飢待零露餐 飢ゑては零露の餐を待つ
- 17 離思固已久 離思は固まことに已に久しく
- 18 寤寐莫与言 寤寐に与に言ふもの莫し
- 19 劇哉行役人 劇しき哉 行役の人
- 20 慊慊恒苦寒 慊慊として恒に寒きに苦しむ

「苦寒行」は、北方の行役に従事する兵士の苦しみの様を詠んだ作品であるが、陸機以前には、魏武帝と魏明帝の作品がある。そのうち陸機が依拠したのは、魏武帝の作品である<sup>注4</sup>。

魏武帝「苦寒行」(『文選』卷二七)

- 1 北上太行山 北のかた太行の山に上る
- 2 艱哉何巍巍 艱なる哉 何ぞ巍巍たる
- 3 羊腸坂詰屈 羊腸 坂は詰屈にして
- 4 車輪為之摧 車輪は之が為に摧かる
- 5 樹木何蕭瑟 樹木 何ぞ蕭瑟たる
- 6 北風声正悲 北風 声 正に悲し
- 7 熊羆对我蹲 熊羆は我に対して蹲り
- 8 虎豹夾路啼 虎豹は路を夾みて啼く
- 9 溪谷少人民 溪谷 人民少なく
- 10 雪落何霏霏 雪の落つること 何ぞ霏霏たる

- 11 延頸長歎息  
 12 遠行多所懷  
 13 我心何怫鬱  
 14 思欲一東帰  
 15 水深橋梁絶  
 15 中路正徘徊  
 17 迷惑失故路  
 18 薄暮無宿棲  
 19 行行日已遠  
 20 人馬同時飢  
 21 擔囊行取薪  
 22 斧冰持作糜  
 23 悲彼東山詩  
 24 悠悠令我哀
- 頰を延ばしては長く歎息し  
 遠く行きては懐ふ所多し  
 我が心 何ぞ怫鬱たる  
 一へに東に帰ることを思欲ふ  
 水 深くして 橋梁 絶ゆれば  
 中路にして正に徘徊す  
 迷惑して故路を失ひ  
 薄暮に宿り棲む無し  
 行き行きて日に已に遠く  
 人馬 同時に飢う  
 囊を擔ひて行きて薪を取り  
 氷を斧りて持て糜を作る  
 彼の東山の詩を悲しみ  
 悠悠として我をして哀しましむ

陸機は、魏武帝の五句から八句の「樹木 何ぞ蕭瑟たる、北風 声 正に悲し。」という二句を「悲風 樹端に鳴る」という一句に凝縮し、「陰雲 巖側に興る。」という一句を付け加え対句にし、その前に「凝冰は重澗に結び、積雪は長巒を被ふ。」という二句を付け加えている。また「熊羆は我に對して蹲り、虎豹は路を夾みて啼く。」には、「猛虎は林に憑りて嘯き、玄猿は岸に臨みて嘆く。」と、動物同士の対応を行っているが、先の自然描写と同様に「白日の景を

靚ず、但だ寒鳥の喧しきを聞くのみ。」という二句をその前に付け加えている。このように陸機は魏武帝の作品をふまえながら、対句を用いて自然や、動物に関する表現を四句にし、兵士の周回注。の描写をすることに力を注いでいることがわかる。また兵士の苦勞については、魏武帝の「迷惑して故の路を失ひ、薄暮に宿り棲るところ無し。行き行きて日に已に遠く、人馬 同時に飢う。囊を擔ひて行きて薪を取り、氷を斧りて持て糜を作る。」という六句を、「夕に喬木の下に宿り、慘愴として恒に飲ひ鮮し。渴いては堅氷の漿を飲み、飢ゑては零露の餐を待つ。」という四句にまとめている。さらに兵士の望郷の思いは、魏武帝の「彼の東山の詩を悲しみ、悠悠として我をして哀しましむ。」という『毛詩』幽風・東山に基づいた表現を、陸機も「寤寐」という『毛詩』衛風・考槃に出典を持つ語句を用いて表現している。

魏武帝の作品は、自ら北方に出征した時に制作したものであり、一一句から一四句に「頰を延ばしては長く歎息し、遠く行きては懐ふ所多し。我が心 何ぞ怫鬱たる、一へに東に帰ることを思欲ふ。」と、魏武帝自身の懐いが詠まれているが、陸機はこの魏武帝の懐いはカットしている。このように陸機は「苦寒行」において、魏武帝と兵士の苦勞という主題は同じくしながらも、その表現の仕方を変えようとしていることがわかる。

陸機「君子行」(『文選』卷二八)

- |          |                               |
|----------|-------------------------------|
| 1 天道夷且簡  | 天道は夷にして且つ簡                    |
| 2 人道嶮而難  | 人道は嶮にして而も難し                   |
| 3 休咎相乘躡  | 休咎は相ひ乗躡し                      |
| 4 翻覆若波瀾  | 翻覆すること波瀾の若し                   |
| 5 去疾苦不遠  | 疾を去つるも遠からざるに苦しみ               |
| 6 疑似実生患  | 疑似は実に患を生ず                     |
| 7 近火固宜熱  | 火に近づけば固より宜しく<br>熱かるべく         |
| 8 履冰豈惡寒  | 氷を履めば豈に寒きを悪まんや                |
| 9 撥蜂滅天道  | 蜂を撥りて天道を滅ぼし                   |
| 10 拾塵惑孔顔 | 塵を拾ひて孔顔を惑はす                   |
| 11 逐臣尚何有 | 逐臣 尚ほ何か有らん                    |
| 12 棄友焉足歎 | 棄友 焉んぞ歎くに足らん                  |
| 13 福鐘恒有兆 | 福の鐘 <small>ち</small> まるは恒に兆有り |
| 14 禍集非無端 | 禍の集まるは端無きに非ず                  |
| 15 天損未易辞 | 天損は未だ辞するに易からず                 |
| 16 人益猶可權 | 人益は猶ほ權ぶ可し                     |
| 17 朗鑒豈遠假 | 朗鑒 豈に遠く假らんや                   |
| 18 取之在傾冠 | 之を取るは傾冠に在り                    |
| 19 近情苦自信 | 近情は自ら信ずるに苦しみ                  |
| 20 君子防未然 | 君子は未だ然らざるに防ぐ                  |

陸機以前には、「君子行」古辞がある。

「君子行」古辞(『樂府詩集』卷三二)

- |          |                                |
|----------|--------------------------------|
| 1 君子防未然  | 君子は未だ然らざるに防ぎ                   |
| 2 不処嫌疑間  | 嫌疑の間に処らず                       |
| 3 瓜田不納履  | 瓜田に履を納れず                       |
| 4 李下不正冠  | 李下に冠を正さず                       |
| 5 嫂叔不親授  | 嫂と叔とは親しく授けず                    |
| 6 長幼不比肩  | 長と幼とは肩を比べず                     |
| 7 勞謙得其柄  | 勞し謙 <small>へん</small> れば其の柄を得ん |
| 8 和光甚独難  | 光を和ぐること甚だ独り難し                  |
| 9 周公下白屋  | 周公は白屋を下り                       |
| 10 吐脯不及餐 | 脯を吐きて餐 <small>くら</small> ふに及ばず |
| 11 一沐三握髮 | 一たび沐するに三たび髮を握り                 |
| 12 後世称聖賢 | 後世に聖賢と称せらる                     |

「君子行」古辞の構成は、六句ずつ二段に分けることができる。各段その冒頭の二句に「君子は未だ然らざるに防ぎ、嫌疑の間に処らず。」「勞し謙れば其の柄を得ん、光を和ぐること甚だ独り難し。」と、まず作者の君子たる者に対する考えが詠まれ、以下四句にその具体例が示されて

それに対して陸機は、結句に「君子は未だ然らざるに防ぐ。」と、古辞に見られる表現をそのまま使用しているものの、その構成、内容は大きく変えて、冒頭四句に「天道は夷にして且つ簡、人道は峻にして而も難し。休咎は相ひ乗躡し、翻覆すること波瀾の若し。」などと、陸機の思想と思われる抽象的な概念を多く詠んでいる。

このように陸機は、「君子行」という楽府題を用い、古辞に見られた表現の一部をそのまま使用し、聞き手（読み手）に古辞との何らかの関連を思わせながら、実際は自分の思想を詠むことに力を注いでいる。つまり表現を部分的に重ね合わせながら、自分の主張を述べているのである。

陸機「折楊柳行」(『陸士衡文集』卷七)

- 1 逸矣垂天景 逸はるかなる矣 垂天の景
- 2 壮哉奮地雷 壮なる哉 奮地の雷
- 3 豊隆豈久響 豊隆 豈に久しく響かんや
- 4 華光但西墮 華光 但だ西に墮\*つるのみ
- 5 日落似有竟 日の落つるは竟り有るに似たり
- 6 時逝恒若催 時の逝くは恒に催もよほるが若し
- 7 仰悲朗月運 仰いでは朗月の運るを悲しみ
- 8 坐觀璇蓋迴 坐しては璇蓋の迴るを觀る
- 9 盛門無再入 盛門 再びは入ること無く
- 10 衰房莫苦開 衰房 苦しみては開くこと莫し

- 11 人生固已短 人生 固もとより已に短く
- 12 出処鮮為諧 出処 諧を為すこと鮮なし
- 13 慨慨惟昔人 慨慨として昔人を惟ひ
- 14 興此千載懷 此の千載の懷ひを興す
- 15 升竜悲絶処 升竜 絶処に悲しみ
- 16 葛藟變條枚 葛藟 條枚に變ず
- 17 寤寐豈虚歎 寤寐に豈に虚しく歎かん
- 18 曾是感与摧 曾ち是れ感と摧となるのみ
- 19 弭意無足歎 意ふを弭めん 歎ぶに
- 20 願言有余哀 願ひて言に余哀有らん

「折楊柳行」は、陸機自身の出処進退がままならないことを嘆いた作品であるが、陸機以前には古辞と魏文帝の作品がある。

「折楊柳行」古辞(『樂府詩集』卷三七)

- 1 默默施行違 默默として施行違へば
- 2 厥罰随事来 厥の罰は事に随ひて来る
- 3 末喜殺竜逢 末喜は竜逢を殺し
- 4 架放於鳴條一解 架は鳴條に放たる一解
- 5 祖伊言不用 祖伊は言へども用ひられず
- 6 紂頭懸白旄 紂の頭は白旄に懸けらる

- |                            |                               |
|----------------------------|-------------------------------|
| 7 指鹿用為馬                    | 鹿を指して用て馬と為し                   |
| 8 胡亥以喪軀 <small>二解</small>  | 胡亥は以て軀を喪ぼす <small>二解</small>  |
| 9 夫差臨命絶                    | 夫差は命の絶ゆるに臨んで                  |
| 10 乃云負子胥                   | 乃ち云ふ 子胥に負くと                   |
| 11 戎王納女楽                   | 戎王は女楽を納れ                      |
| 12 以亡其由余                   | 以て其の由余を亡 <small>うしな</small> ふ |
| 13 璧馬禍及統                   | 璧馬にて禍は統に及び                    |
| 14 二国俱為墟 <small>三解</small> | 二国は俱に墟と為る <small>三解</small>   |
| 15 三夫成市虎                   | 三夫の市に虎ありと成せば                  |
| 16 慈母投杼趨                   | 慈母は杼を投じて趨る                    |
| 17 卞和之刖足                   | 卞和は之きて足を刖られ                   |
| 18 接輿歸草廬 <small>四解</small> | 接輿は草廬に歸る <small>四解</small>    |
- 魏文帝 (『樂府詩集』卷三七)
- |                           |                            |
|---------------------------|----------------------------|
| 1 西山一何高                   | 西山 一に何ぞ高き                  |
| 2 高高殊無極                   | 高高として殊に極まり無し               |
| 3 上有兩仙僮                   | 上に兩仙僮有り                    |
| 4 不飲亦不食                   | 飲まず亦た食はず                   |
| 5 与我一丸藥                   | 我に一丸藥を与ふ                   |
| 6 光耀有五色 <small>二解</small> | 光り耀き五色有り <small>一解</small> |
| 7 服藥四五日                   | 服藥すること四五日                  |
| 8 身體生羽翼                   | 身體 羽翼を生ず                   |
| 9 輕拳乘浮雲                   | 輕拳して浮雲に乗り                  |

- |                            |                                   |
|----------------------------|-----------------------------------|
| 10 倏忽行万億                   | 倏忽として行くこと万億                       |
| 11 流覽觀四海                   | 流覽して四海を觀れば                        |
| 12 茫茫非所識 <small>二解</small> | 茫茫として識る所に非ず <small>二解</small>     |
| 13 彭祖称七百                   | 彭祖は七百と称し                          |
| 14 悠悠安可原                   | 悠悠として安 <small>いづ</small> んぞ原ぬ可けんや |
| 15 老聃適西戎                   | 老聃は西戎に適き                          |
| 16 于今竟不還                   | 今に于て竟に還らず                         |
| 17 王喬假虚辞                   | 王喬は虚辞を假り                          |
| 18 赤松垂空言 <small>三解</small> | 赤松は空言を垂る <small>三解</small>        |
| 19 達人識真偽                   | 達人は真偽を識るも                         |
| 20 愚夫好佞佞                   | 愚夫は佞佞するを好む                        |
| 21 追念往古事                   | 追念す 往古の事                          |
| 22 憤憤千万端                   | 憤憤たり 千万端                          |
| 23 百家多迂怪                   | 百家 迂怪多きも                          |
| 24 聖道我所觀 <small>四解</small> | 聖道 我の觀る所なり <small>四解</small>      |
- 古辞は、愚かな君主が、忠臣の諫言を聞き入れなかったために罰を被った例を史実に従ってあげており、魏文帝は、仙人に対する懷疑を詠んでいる。これらと陸機の作品は、表現、内容ともに全く関係がなく、陸機独自の内容になっていることがわかる。
- 以上のことから、陸機における前代作品の継承方法をまとめると

(1) 冒頭の場面設定をふまえながら、その主題を変える。「門有車馬客行」より

(2) 主題を同じくしながら、表現の仕方を変える。「苦寒行」より

(3) 表現を部分的に重ね合わせながら、自分の主張を述べる。「君子行」より

(4) 前代の作品をふまえず、陸機独自の内容にする。「折楊柳行」より

という四点になることがわかる。そして陸機の樂府全体における割合を見て行くと、(1)(2)(3)の継承方法を用いて、何らかの形で前代の作品をふまえているものが、ほぼ半数に及ぶのである。<sup>注6</sup>

### (三)

陸機の前代作品における継承方法は、先に見た通りであるが、果たしてこのような方法は、陸機独自のものなのであろうか。このことを明らかにするために、以下に陸機以前の樂府制作者たちにおける前代作品の継承方法について見て行くことにする。

まず魏武帝や魏文帝は、いくつかの先行研究によって論じられているように、前代の作品をふまえているとは言えない。<sup>注7</sup>

次に建安の七子である陳琳と王粲には、数は少ないがそれぞれ一首ずつ「飲馬長城窟行」と「從軍行」がある。

「飲馬長城窟行」古辞(『文選』卷二七)

- |          |                                 |
|----------|---------------------------------|
| 1 青青河畔草  | 青青たり 河畔の草                       |
| 2 縣縣思遠道  | 縣縣として遠道を思ふ                      |
| 3 遠道不可思  | 遠道 思ふ可からざるも                     |
| 4 夙昔夢見之  | 夙昔 夢に之を見る                       |
| 5 夢見在我傍  | 夢に見るときは私の傍に在れども                 |
| 6 忽覺在他鄉  | 忽として覚むれば他郷に在り                   |
| 7 他郷各異縣  | 他郷は各々縣を異にし                      |
| 8 輾轉不可見  | 輾轉するも見る可からず                     |
| 9 枯桑知天風  | 枯桑は天風を知り                        |
| 10 海水知天寒 | 海水は天寒を知る                        |
| 11 入門各自媚 | 門に入りては各自 <small>おのづか</small> 媚び |
| 12 誰肯相為言 | 誰か肯て相ひ為に言はん                     |
| 13 客從遠方來 | 客の遠方従り來りて                       |
| 14 遺我双鯉魚 | 我に双鯉魚を遺る                        |
| 15 呼兒烹鯉魚 | 兒を呼びて鯉魚を烹る                      |
| 16 中有尺素書 | 中に尺素の書有り                        |
| 17 長跪讀素書 | 長跪して素書を読む                       |
| 18 書中竟何如 | 書中 竟に何如                         |
| 19 上有加餐飯 | 上には餐飯を加へよと有り                    |
| 20 下有長相憶 | 下には長く相ひ憶ふと有り                    |

陳琳「飲馬長城窟行」(『玉台新詠』卷一)

- 1 飲馬長城窟
- 2 水寒傷馬骨
- 3 往謂長城吏
- 4 慎莫稽留太原卒
- 5 官作自有程
- 6 挙築諧汝声
- 7 男兒寧当格闘死
- 8 何能拂鬱築長城

## (中略)

## (以下略)

馬を長城の窟に飲みふ  
 水 寒くして馬骨を傷ましむ  
 往きて長城の吏に謂ふ  
 慎みて太原の卒を稽留すること莫れと  
 官作 自ら程有り  
 築を挙げて汝が声を諧かたへよと  
 男兒は寧ろ当に格闘して死すべし  
 何ぞ能く拂鬱として長城を築かんと  
 辺城には健少多く  
 内舎には寡婦多し  
 書を作りて内舎に与ふ  
 便嫁して留住すること莫れ  
 善く新姑嬢に事へ  
 時時 我が故夫の子を念へと  
 報書 辺地に往く  
 君の今 語を出だすことの一に  
 何ぞ鄙なると

陳琳は、冒頭で「馬を長城の窟に飲みふ、水寒くして馬骨を傷ましむ。往きて長城の吏に謂ふ、慎みて太原の卒を稽留すること莫れと。官作自ら程有り、築を挙げて汝が声を諧へよと。男兒は寧ろ当に格闘して死すべし、何ぞ能く拂鬱として長城を築かんと。」として、古辞では具体的に出て来なかつた、兵士である夫を登場させている。また夫のいる場所を「長城の窟」に設定し、そこでの兵役の不満を夫に語らせ、それに対する役人の返事を詠む。このような設定は、以下に続く内容を詠みやすくするためのものであると考えられる。その内容は、妻と夫の手紙のやり取りである。古辞では「客の遠方従り来りて、我に双鯉魚を遺る。児を呼びて鯉魚を烹る、中に尺素の書有り。」と、妻が夫から手紙を受け取るだけであるが、陳琳の作品では「便嫁して留住すること莫れ、善く新姑嬢に事へ、時時 我が故夫の子を念へと。報書 辺地に往く。君の今 語を出だすことの一に何ぞ鄙なると。」などとあるように、夫の手紙に妻が返事を書き、夫がそれを受け取る内容が詠まれている。このように陳琳は、男女の情愛の様子を詠んだ古辞の主題を継承し、これを表現する方法として、古辞にあった手紙のやり取りから発想を得て、それを具体的に発展させていることがわかる。

王粲の「従軍行」には、彼以前に断片しか現存していないが左延年の「従軍行」がある。

左延年「從軍行」(引『樂府詩集』卷三二「從軍

行」樂府解題)

- 1 苦哉辺地人 苦しい哉 辺地の人
- 2 一歳三從軍 一歳に三たび從軍す
- 3 三子到敦煌 三子は敦煌に到り
- 4 二子詣隴西 二子は隴西に詣る
- 5 五子遠鬪去 五子は遠く鬪ひ去り
- 6 五婦皆懷身 五婦は皆な懷身す

王粲「從軍詩五首」其一(『文選』卷二七)

- 1 從軍有苦樂 軍に從ふに苦樂有れば
- 2 但問所從誰 但だ問ふ 從ふ所は誰ぞと
- 3 所從神且武 從ふ所は神に且つ武なれば
- 4 焉得久勞師 焉んぞ久しく師を勞ふを得ん
- 5 相公征関右 相公の関右を征するや
- 6 赫怒震天威 赫怒として天威を震ふ
- 7 一挙滅獯虜 一挙して獯虜を滅ぼし
- 8 再拳服羌夷 再拳して羌夷を服す
- 9 西収辺地賊 西のかた辺地の賊を収へ
- 10 忽若俯拾遺 忽かなること俯して遺ちたるを拾ふが若し
- 11 陳賞越丘山 賞を陳ぬること丘山に越ぎ

- 12 酒肉踰川坻 酒肉は川坻に踰えたり
- 13 軍中多飢饒 軍中には飢饒多く
- 14 人馬皆溢肥 人馬は皆な溢肥す
- 15 徒行兼乘還 徒行は乘を兼ねて還り
- 16 空出有余資 空しく出づるも余資有り
- 17 拓地三千里 地を拓くこと 三千里
- 18 往返速若飛 往返 速きこと飛ぶが若し
- 19 歌舞入鄴城 歌舞して鄴城に入り
- 20 所願獲無違 願ふ所 獲て違ふ無し
- 21 尺日処大朝 日を尽くして大朝に処り
- 22 日暮薄言歸 日 暮れて薄か言に歸る
- 23 外參時明政 外は時の明政に參じ
- 24 内不廢家私 内は家私を廢らず
- 25 禽獸憚為犧 禽獸 犧と為るを憚るも
- 26 良苗実已輝 良苗 実に已に輝れり
- 27 竊慕負鼎翁 竊かに負鼎の翁を慕ひ
- 28 願厲朽鈍姿 願はくは朽鈍の姿を厲(厲)まさんことを
- 29 不能效沮溺 沮溺に效ひて
- 30 相隨把鋤犁 相ひ隨ひて鋤犁を把る能はず
- 31 孰覽夫子詩 孰(孰) 夫子の詩を覽るに
- 32 信知所言非 信に言ふ所の非なるを知る

王粲の「從軍詩五首」其一是、魏武帝が建安二十年から二十一年にかけて張魯や孫權を攻めた時、侍中として加わった王粲が、魏武帝のたび重なる戦勝をことほぎ、そのようにすばらしい魏武帝に仕える我が身の志を詠んだものである。このように王粲の「從軍詩五首」は、王粲自身の個人的な事柄を詠んでおり、左延年と戦地という枠組みは共通するものの、その表現をふまえているとは言えない<sup>注8</sup>。曹植も魏武帝、魏文帝らと同様に前代の作品をふまえていない作品が多いが、前代の作品に何らかの影響を受けたと思われる作品がいくつかある。

「塘上行」古辞（『樂府詩集』卷三五）

- 1 蒲生我池中 蒲は我が池中に生ず
- 2 其葉何離離 其の葉 何ぞ離離たる
- 3 傍能行仁儀 傍の能く仁儀を行ふも
- 4 莫若妾自知 妾の自ら知るに若くは莫し
- 5 衆口鑠黃金 衆口は黄金を鑠かしめ
- 6 使君生別離 君をして生別離せしむ
- 7 念君去我時 君の我を去りし時を念ひ
- 8 独愁常苦悲 独り愁ひて常に苦しみ悲しむ
- 9 想見君顔色 君の顔色を見ることを想ひて
- 10 感結傷心脾 感は結ぼれて心脾を傷ましむ
- 11 念君常苦悲 君を念ひて常に苦しみ悲しむ

- 12 夜夜不能寐 夜夜 寐ぬること能はず
- 13 莫以豪賢故 豪賢の故を以て
- 14 棄捐素所愛 素の愛する所を棄捐ること莫かれ
- 15 莫以魚肉賤 魚肉の賤しきを以て
- 16 棄捐葱与薤 葱と薤とを棄捐ること莫かれ
- 17 莫以麻桌賤 麻桌の賤しきを以て
- 18 棄捐菅与蒯 菅と蒯とを棄捐ること莫かれ
- 19 出亦復苦愁 出でても亦た復た苦しみ愁ひ
- 20 入亦復苦愁 入りても亦た復た苦しみ愁ふ
- 21 辺地多悲風 辺地に悲風多く
- 22 樹木何修修 樹木 何ぞ修修たる
- 23 從君致独樂 君に従ひて独りの樂しみを致し
- 24 延年寿千秋 年を延べて寿は千秋たらん

曹植「蒲生行浮萍篇」（『曹子建集』卷六）

- 1 浮萍寄清水 浮萍 清水に寄り
- 2 随風東西流 風に随ひて東西に流る
- 3 結髮辭敵親 髪を結びて敵親を辞し
- 4 来為君子仇 来りて君子の仇と為る
- 5 恪勤在朝夕 恪勤して朝夕に在るに
- 6 無端獲罪尤 端無くして罪尤を獲る
- 7 在昔蒙恩惠 在昔 恩恵を蒙り
- 8 和樂如瑟琴 和樂して瑟琴の如し

- 9 何意今摧頹  
 10 眇若商与参  
 11 茱萸自有芳  
 12 不若桂与蘭  
 13 新人雖可愛  
 14 無若故所歆  
 15 行雲有返期  
 16 君恩儻中還  
 17 慊慊仰天歎  
 18 愁心將何愜  
 19 日月不恒処  
 20 人生忽若寓  
 21 悲風来入懷  
 22 淚下如垂露  
 23 発篋造裳衣  
 24 裁縫紈与素
- 何ぞ意はん 今 摧頹し  
 眇として商と参の若くなることを  
 茱萸 自ら芳有れど  
 桂と蘭とに若かず  
 新人 愛す可きと雖も  
 故の歆ぶ所に若くは無し  
 行雲は返る期有り  
 君恩は儻は中ごろ還らん  
 慊慊として天を仰ぎて歎じ  
 愁心 將に何くにか愜へんとする  
 日月 恒に処らず  
 人生 忽として寓の若し  
 悲風 来りて懐に入り  
 涙 下りて垂露の如し  
 篋を発きて裳衣を造り  
 紈と素とを裁縫す

曹植の「蒲生行浮萍篇」は、「塘上行」古辞の冒頭に「蒲は生ず」とあるのを題名とするので、「塘上行」古辞と関連があると思われる。その内容は、古辞と同様に讒言に遭つて男性に棄てられた女性の嘆きを、時間の流れを詠み込むなどして整理し、主題を同じくしながら表現の仕方を変えていることがわかる。

そして魏明帝に至って、彼以前の楽府制作者にはなかつた継承方法を用いた作品が登場する。

魏明帝「種瓜篇」(『玉台新詠』卷二)

- 1 種瓜東井上  
 2 冉冉自喻垣  
 3 与君新為婚  
 4 瓜葛相結連  
 5 寄託不肖軀  
 6 有如倚太山  
 7 菟絲無根株  
 8 蔓延自登縁  
 9 萍藻託清流  
 10 常恐身不全  
 11 被蒙丘山恵  
 12 賤妾執拳拳  
 13 天日照知之  
 14 想君亦俱然
- 瓜を種う 東井の上  
 冉冉として自ら垣を喻ゆ  
 君と新たに婚を為し  
 瓜葛 相ひ結連す  
 不肖の軀を寄託するは  
 太山に倚るが如くなる有り  
 菟絲には根株無きも  
 蔓延は自ら登縁す  
 萍藻は清流に託し  
 常に身の全からざらんことを恐る  
 丘山の恵を被蒙り  
 賤妾 執りて拳拳たり  
 天日 之を照知す  
 相ふに君も亦た俱に然らん

「種瓜篇」は、新婚の女性の懐いを詠んだ作品であるが、これは以下に挙げる曹植「種葛篇」の冒頭をふまえているものである。

曹植「種葛篇」冒頭（『玉台新詠』卷二）

- 1 種葛南山下 葛を種う 南山の下
- 2 葛蔓自成陰 葛蔓 自ら陰を成す
- 3 与君初婚時 君と初めて婚せし時
- 4 結髮恩義深 結髮 恩義 深し

（以下略）

このように魏明帝は「種瓜篇」において、曹植の「種葛篇」の冒頭をふまえて、曹植自身の思いが託されている棄てられた婦人の思いを、新婚の女性の夫に対する思いに変えていることがわかる<sup>注40</sup>。次に西晋を代表する楽府制作者である傅玄について見て行く。

傅玄「飲馬長城窟行」（『玉台新詠』卷二）

- 1 青青河辺草 青青たり 河辺の草
- 2 悠悠万里道 悠悠たり 万里の道
- 3 草生在春時 草の生ずるは春時に在り
- 4 遠道還期 遠道 還るに期有り
- 5 春至草不生 春 至るも草は生ぜず
- 6 期尽歎無声 期尽きて声無きを歎く
- 7 感物懷思心 物に感じては思心を懷き
- 8 夢想発中情 夢に想ひては中情を発す

- 9 夢君如鴛鴦 君を夢みるに鴛鴦の如くして
- 10 比翼雲間翔 翼を比べて雲間に翔ける
- 11 既覚寂無見 既に覚むれば寂として見る事  
無く

- 12 眩如参与商 眩として参与商の如し
- 13 河洛自用固 河洛は自ら用て固しとするも
- 14 不如中岳安 中岳の安きに如かず
- 15 回流不及反 回流 反るに及ばず
- 16 浮雲往自還 浮雲 往きて自ら還る
- 17 悲風動思心 悲風 思心を動かし
- 18 悠悠誰知者 悠悠として誰か知る者ぞ
- 19 懸景無停居 懸景 停居すること無く
- 20 忽如馳駟馬 忽として駟馬を馳するが如し
- 21 傾耳懷音響 耳を傾けて音響を懐ひ
- 22 轉目淚双墮 目を転じて 涙 双墮す
- 23 生存無会期 生存に会する期無く
- 24 要君黄泉下 君を黄泉の下に要たん

傅玄の継承方法として特筆すべきものは、魏の楽府制作者が前代作品をふまえなかったのに対し、作品によって強調する部分は異なるが、漢代の古辞に模倣した作品を制作していることである<sup>注11</sup>。「飲馬長城窟行」では、古辞の冒頭「青青たり 河畔の草、懸懸として遠道を思ふ。」を、「青

青たり 河辺の草、悠悠たり 万里の道。」としてふまえ、古辞にあった妻が夫から手紙を受け取るという内容をカットして、その前半にあった夫を思う妻の心情をより細かく詠んでいる。

以上より、陸機以前の主要な楽府制作者の継承方法をまとめると、以下のようになる<sup>注42</sup>。

(A) 前代作品に関係なく、それぞれ独自の内容にする。

(B) 大きな枠組み(場など)は同じであるが、内容は異なる。

(C) 主題を同じくしながら、表現の仕方を変える。

(D) 冒頭の場面設定をふまえながら、その主題を変える。

(E) 漢代古辞の模倣的作品

これらと(二)に挙げた陸機の継承方法を比べてみると、その形式は陸機以前の楽府制作者たちに既に見られるものであることがわかる。しかし個々の作品を詳しく検討すると、陸機における独自性が明らかになる。それは、陸機以前の楽府制作者たちが、(C)、(D)の継承方法を用いた場合には、主にそれぞれの作者の懐いが詠まれていない非詠懐的作品を制作していたのに対し、陸機は表現面での対応もしながら、彼自身の懐いを詠じた詠懐的作品を制作していることである<sup>注43</sup>。

#### (四)

それではなぜ、陸機は以上見てきたような継承方法を用いて楽府を制作したのであろうか。冒頭で述べたように、陸機の楽府には詠懐的作品と、非詠懐的作品があるが、ここではそれぞれの場合に分けて考察することにする。

陸機の詠懐的作品のうち、(4)の前代作品を全くふまえず、陸機独自の内容にするものは、魏の楽府制作者の継承方法を受け継ぐものであるが、これらの特徴として「上留田行」<sup>注14</sup>を除き、独自の形式になっていることがあげられる。それに対して(1)に分類される作品では、「短歌行」<sup>注15</sup>を除き、作中人物が設定されている。ここから(1)に分類される作品では、陸機が前代作品をふまえる時に、自分の懐いを語らせることができる作中人物が設定されている作品を選んでいくことがわかる。このようなふまえ方をした理由として、先人の作品に載せれば自分の懐いが述べやすかったということが言えるであろう。そしてこの先人の作品に載せれば自分の懐いが述べやすかったということを考えて、(2)に分類される「駕言出北闕行」<sup>注16</sup>や「順東西門行」の、宴を催して今を楽しまうという主題は、「古詩十九首」などに見られるものであるので、そこに陸機自身の懐いを挿入することは簡単であり、(1)のように作中人物を設定する必要がなかったと言うこともできる。これは、

(1) に分類される「短歌行」で、陸機以前の作品には様々な内容が詠まれているのかかわらず、ふまえる対象を「時の推移」を冒頭に詠んでいる魏武帝二首の其一<sup>注17</sup>を選んでのことからも言える。また(3)の「君子行」も古辞の「君子は未だ然らざるを防ぐ。」という表現から浮かぶ内容があったから、作中人物を設定しなかったのである。

(4) に分類される作品の特徴である独白の形式を取り、自らの懐いを述べるのは、魏武帝、魏文帝らの楽府制作の特徴でもあり、(1) に分類される作品の特徴である作中人物を設定して自らの懐いを述べるのは、曹植の特徴であった。<sup>注18</sup> そして傅玄は非詠懐的作品のみであったが、前代作品を模擬するという制作方法を提示した。このような先人の継承方法と、制作方法がまずあり、陸機は、先人の特徴を自分の懐いが述べやすいようにうまく利用し、融合させて、詠懐的作品を制作したと言える。そしてこのようにして楽府を制作することによって、陸機自身の懐いをより深く聞き手(読み手)に伝えようとする目的があったのであろう。

また陸機以前の楽府制作者が、非詠懐的作品の場合にか前代の作品をふまえるものを制作しなかったのに対し、陸機は詠懐的作品においても前代の作品をふまえている。おそらく彼はそれによって、新しい楽府制作の態度を表し、

聞き手(読み手)に対して文才を示すことができると考えていたのであろう。

この文才を示すということは、非詠懐的作品において顕著に示されている。模擬作品として非詠懐的作品を制作することが、傅玄によって行われるようになり、陸機もその影響を受けていると考えられるが、陸機は傅玄のように完全に模擬するのではなく、「日出東南隅行」<sup>注19</sup>で古辞や傅玄が羅敷について詠んでいたのに対し、その冒頭をふまえながら、内容を全く変えて高台の美女について詠むなど、何らかの形で前代作品をふまえながらも、陸機独自のものを詠もうとしている。<sup>注20</sup>

このように陸機は、楽府を制作することによって、自らの懐いを伝えるとともに、その文才を示すことを目的としていたということができらるであらう。

#### (注)

1 詠懐的作品と非詠懐的作品の分類は、以下の通りである。

#### 詠懐

飲馬長城窟行、門有車馬客行、長安有狹邪行、短歌行、塘上行、猛虎行、順東西門行、鷦言出北闕行、君子行、上留田行、悲哉行、月重輪行、董逃行、梁甫吟、予章行、折楊柳行、秋胡行、隴西行、長歌行、太山吟、吳趨行、東武吟行、

君子有所思行、齊謳行、鞠歌行、日重光行  
非詠懷 日出東南隅行、苦寒行、從軍行、燕歌行、挽歌、

前緩声歌、健仔怨、權歌行

2 注1に挙げた作品のうち、吳趨行、東武吟行、君子有所思行、齊謳行、鞠歌行、日重光行、悲哉行を除くものが、前代に同題及び関連のある作品が現存している。

3 陸機の時代には、漢・魏の古曲を本歌として制作された歌辞が楽府であった。増田清秀氏『楽府の歴史的研究』(創文社 一九七五 七頁)参照。

4 魏明帝「苦寒行」(『楽府詩集』卷三三)は、出征した彼が魏武帝に関わる地を見た際の感慨を詠んだ作品である。

5 佐藤利行氏は、『西晋文学研究』(白帝社 一九九五 四六六頁)において、陸雲が「南征賦」を陸機に添削してもらったことに関して、草稿と完成稿を比較し、その添削過程において、もとの二句をそのまま利用して、それぞれに新しい句を配して四句にしていると指摘されている。この場合も、このような句数の増添方法が働いたのかもしれない。

6 全作品を分類すると以下のようになる。

(1) 飲馬長城窟行、門有車馬客行、長安有狹邪行、短歌行、塘上行、猛虎行 日出東南隅行

(2) 順東西門行、鷺言出北闕行 苦寒行、從軍行、燕

歌行、挽歌、前緩声歌、健仔怨

(3) 君子行

(4) 上留田行、月重輪行、董逃行、梁甫吟、予章行、

折楊柳行、秋胡行、長歌行、太山吟 權歌行

7 植木久行氏は、『曹操楽府詩論考』(『中国学論集』所収 竜溪書舎 一九七四 一〇六頁)において「曹操は、

模倣作品を多作しながら、歌辞内容の面では、全く新鮮な詩句を吐露する。それは、時には、全く古辞内容との脈絡をもたぬ作品となり、また、時には、既成の古辞内容に知識人としての理性に基づく責務や理想を加えた作品ともなっており、強い論理性を帯びることになる。」と指摘されている。また鈴木修次氏は、『漢魏詩の研究』(大修館書店 一九六七 四九九頁)において、建安の文人たちは「楽府題を共にする作品が、題名が同じであるからといって、共通の詩的主題を有するとは、一般的には考えられない。ただ、謳われる曲名を、たまたまともにしたというていどにとどまるようである。」と指摘されている。

8 王粲「從軍行」其二から五も戦地における個人的事柄を詠んだ作品である。

9 曹植「蒲生行浮萍篇」は、『玉台新詠』卷二などでは「浮萍篇」となっている。

10 魏明帝の作風については、鈴木修次氏が『漢魏詩の研

究』(大修館書店 一九六七 六七七頁)において「発想においても、用語においても、模倣がめだち、なおその作品に流れる統一的抒情性がなく、しばしば代作を予想させる。」と指摘されている。

11 傅玄の楽府については、岡村貞雄氏「楽府題の継承と傅玄」(『支那学研究』三五 一九七〇)や、藤井守氏「西晋時代の楽府―陸機を中心として―」(『広島大学文学部紀要』三六 一九七六)に詳論がある。

12 陸機以前の主要な楽府制作者の継承方法は以下のようになる。

(A) 魏武帝 善哉行、步出夏門行、薤露、蒿里行、陌上桑、秋胡行

魏文帝 善哉行、折楊柳行、秋胡行、猛虎行、飲馬

長城窟行、艶歌何嘗行、短歌行、陌上桑、

月重輪行

曹植 薤露、鰕鮒篇、吁嗟篇、丹霞蔽日行、怨詩

行、怨歌行、予章行、箜篌引

魏明帝 善哉行、步出夏門行、短歌行、長歌行

嵇康 秋胡行

傅玄 艶歌行有女篇、短歌行、長歌行、予章行、

放歌行、惟漢行、董逃行歴九秋篇

(B) 王粲 從軍行

曹植 当来日大難

魏明帝 苦寒行

(C) 陳琳 飲馬長城窟行

曹植 蒲生行浮萍篇

魏明帝 燕歌行、月重輪行

傅玄 怨歌行朝時篇、秦女休行

(D) 魏明帝 種瓜篇

傅玄 牆上難為趨

(E) 傅玄 (秋胡行二首)、飲馬長城窟行、艶歌行、美

女篇

13 曹植「蒲生行浮萍篇」や「美女篇」などは、女性に曹

植の懐いが託されているが、陸機のように前代の作品と表現面での対応を強く呈していない。その意味において

陸機と区別している。

14 陸機「上留田行」(『陸士衡文集』卷七)

嗟行人之藹藹、駿馬陟原風馳、輕舟汎川雷邁

寒往暑来相尋、零雪霏霏集宇、悲風徘徊入襟

歲華冉冉方除、我思纏綿未紵、感時悼逝悽如

15 陸機「短歌行」(『文選』卷二八)

置酒高堂、悲風臨觴、人壽幾何、逝如朝霜

時無重至、華不再陽、蘋以春暉、蘭以秋芳

来日苦短、去日苦長、今我不樂、蟋蟀在房

樂以會興、悲以別章、豈曰無感、憂為子忘

我酒既旨、我肴既臧、短歌有詠、長夜無荒

16 陸機「駕言出北闕行」(『陸士衡文集』卷七)

せている。

駕言出北闕、躑躅遵山陵、長松何鬱鬱、丘墓互相承  
念昔徂歿子、悠悠不可勝、安寢重冥廬、天壤莫能與  
人生何所促、忽如朝霜凝、辛苦百年間、戚戚如履冰  
仁知亦何補、遷化有明徵、求仙鮮克仙、太虛不可凌  
良會罄美服、對酒宴同聲

陸機「順東西門行」(『陸士衡文集』卷七)

出西門、望天庭、陽谷既虛崦嵫盈  
感朝露、悲人生、逝者若斯安得停  
桑柘戒、蟋蟀鳴、我今不樂歲聿征  
迨未莫、及世平、置酒高堂宴友生  
激朗笛、彈哀箏、取樂今日盡歡情

17 魏武帝「短歌行」冒頭(『文選』卷二七)

對酒當歌、人生幾何、譬如朝露、去日苦多

18 このことについては佐藤大志氏「鮑照樂府詩の特質」

(『中国中世文学研究』二八 一九九五)に既に指摘さ  
れている。

19 陸機「日出東南隅行」冒頭(『文選』卷二八)

扶桑升朝暉、照此高台端、高台多妖麗、邃房出清顏  
「陌上桑」古辭冒頭(『樂府詩集』卷二八)

日出東南隅、照我秦氏樓、秦氏有好女、自名為羅敷  
例えば「燕歌行」(『陸士衡文集』卷七)では、魏文帝

の二首に大きく抛りながら、夫を思う妻の様子を変化さ